

東の風



やさしく
かしこく
たくましく

No.34

平成29年7月3日(月)

文責：園田

学校教育目標：心豊かに 自ら学び たくましく生きる子どもの育成

安心と自信

そして

意欲と勇気



先日、図書担当から発行された「東っ子図書館だより」では、『家族ふれあい読書』のことが書かれており、保護者の皆様のご感想がいくつか紹介されていました。その中に次のようなものがありました。

子どもが選んだ本は優しいお母さんと甘えん坊の子どものお話でした。「ひとり立ちを
ためらう子どもの背中をそっと優しく押し上げる絵本です。」と書いてありました。
そんな優しいお母さんになりたいな・・・と思いながら読みました。



「ひとり立ち」・・・子どもの自立です。幼い子ども達も成長し、やがて自立していくことになります。実は子どもは、かなり幼い頃から「自立心」が芽生えます。皆さん、ご自身が子どもの頃や子どもさんが幼かった頃を思い出してみてください。母親にしてもらっていたことを「自分でしたい。」と言い出したことがあるはず。まだうまくはできないのに、「自分でスプーンや箸をもって食べようとする。」とか「服の脱ぎ着をしようとする。」といった簡単なことなどがその例です。これはその子の自立心の芽生えに他なりません。それが自立の第一歩。こんな小さな自立の為の意識と行動が積み重なり、やがて本当の自立に向かい始めます。

「しっかりと親の愛情を受け、感じ取った子どもほど、自立が早い。」といわれています。

「甘えさせすぎると、親を頼ってしまい、自立できないのではないか？」と思う方もいらっしゃるでしょう。**逆です。「甘やかすこと」は良くありませんが、「甘えさせること」は大切です。(この違いが重要です。)**

親から愛情を受けること、親の愛情を感じることで、子どもが幸せを感じることはありません。

親から、十分な愛情を受けると「自分は大切な存在である。」とか「自分は価値がある。」ということを感じ、自然と理解し、自己肯定感の基礎が出来上がります。そのことによって子どもは大きな安心を感じ、自分に自信をもつことができるのです。そしてやる気や勇気が自然と湧いてきます。

十分な愛情を感じ取って育つ子どもは、そもそも「自分は価値のない人間ではないか」とか、「親は自分を愛しているのか？親から愛されていないのではないか？」という疑問を持つ必要がない。そんな疑問が生じないのだそうです。「不安」がなく、無意識のうちに「守られている」とわかっているため、安心して自立することができるということのようです。そうして自己肯定感が育まれた子どもは、苦しいことや辛いことがあっても、それを乗り越える力が身に付き、**自分のことも他者のことも、認めて受け入れ、そして大切にすることができるようになる**そうです。

愛情のもと「安心と自信」を感じ、そして「意欲と勇気」をもった子どもは、大きな安心感をもって「自立」するのです。



一方、十分な愛情をもらえなかった子どもは、その欲求が満たされないまま育ち、無意識のうちに自分を認めてほしい、愛してほしいという願望から、依頼心が強かったり、耐性が低かったり、自己中心的で、自分や他者に攻撃的であったり、大切にできなかったりということに繋がりがやすい傾向もあるようです。

体の感覚を通して愛情を伝えるスキンシップ。目や耳からの感覚や言葉を通して心を通わせるコミュニケーション。これらをできるだけおこなって、子どもにしっかりと愛情を伝えていきたいものです。**お母さんやお父さんの温かな眼差しで見つめられ、優しい声を聴き、肌のぬくもりを感じながらの「家族ふれあい読書」はまさにそんな愛情を伝えることのできる幸せな時間だと思います。**ぜひ、今後も取り組んでみてください。